

市来清也著『国際物流要論』

木村武彦
(名古屋港管理組合)

1. はじめに

今度、流通経済大学流通問題研究所叢書の一冊として、市来清也教授の筆になる「国際物流要論」が出版された。本書の出版の目的を「まえがき」の中で著者は次のように言っている。すなわち、「国際物流に関して、初めて学ぼうとする学生、研究者および企業の国際物流担当者などを対象として、その立場にたって、国際物流の実務や理論および管理運営について基礎的知識をはじめ、国際物流における合理化方策ならびに国際物流業のあり方などを理解しやすいように解説したものである。」と述べている。

確かに著者の意図どおり、第1章「国際物流と貿易」第2章「国際物流の主な形態と業務」第3章「国際物流の合理化」第4章「国際物流業の本質と課題」と章を追って実務や理論および管理運営についての基礎的知識の解説にしたがって読み進めばわかるように構成されている。しかしながら、第3章第V節「企業経営と国際物流」第4章「国際物流業の本質と課題」の節と章が本書の国際物流の理論的基礎を展開したもので、これまでの教授の研究テーマである国際物流の貴重な成果ではなからうか。

教授は、これまでに「海運実務の基礎」、「物流経営論」、「倉庫業界」、「倉庫概論」、「港湾管理論」等の著書、その他に物流に関する多数の共書や論文を発表しており、物流論の権威として学界に雄飛されている。教授は、旧制長崎高商卒業後、日本通運(株)、日通総合研究所における実務経験と物流の調査研究に精励され、その後神戸商船大、流通経済大で教鞭をとられるかたわら、物流に関する研究に専念され、今日ある物流研究の第一人者として地歩を固めてこられたのである。

物流は企業経営の中においてすら、長い間その存在さえなおざりにされてきておりあらゆる産業分野の生産過程の合理化の終焉を経て、暗黒大陸といわれる物流を解明することによって、企業経営の利潤拡大の源泉を生み出すことが出来ると認識され始めたのは、わが国においては、高度経済成長以降のことであった。

特に、今回テーマとなった国際物流が、これまでの加工貿易型から製品輸入型あるいは国際分業型への貿易構造の転換に伴って、従来の貿易という概念からもう一步踏み込んで国際物流という領域を確立させつつあり、本書は解説書とは銘打っているものの、既に指摘した第3章第V節、第4章は国際物流論の理論確立への試みとしての

貴重な業績であろうと確信している。

2. 本書の構成と内容

本書の構成と内容を目次に従って述べることにしよう。

第1章「国際物流と貿易」は、第1節「国際物流の概念」、第2節「貿易動向と国際物流」、第3節「国際物流と貿易手続」の3節で構成されている。

第1節では、国際物流 (international physical distribution) を定義して、「生産と消費が2国以上にまたがって行われる場合に、この生産と消費の間の空間的、時間的隔りを克服するための有形の財貨についての物理的な国際経済活動である」(4頁)と唱えている。すなわち、国際間における経済財の供給者から需要者に受渡されるまでの空間的、時間的隔りを物理的に克服することによって、その経済財の効用、すなわち経済的価値の増大を図ることを目的にしている。そのためには、国際間にわたり、必要な量の経済財を、必要な時間に、必要な場所に、最適のコストで提供することを目指しているために、国際物流の合理化が必須な要素となる。個別経済的には、国際物流の需要者(利用者)にとって、生産や国際市場での販売に最適の物の流れが得られることになり、物流コストの引下げやサービス向上を伴うと共に、販売促進につながり個別企業の繁栄が図られる。また、物流企業(供給者)にとっては、良質で効率的な国際物流用役の生産と販売を通じて、経済社会における企業基盤の確立が可能となる。一方、国民経済的には、国際的物の流れの諸活動が合理化されることにより、全般的な輸出入物資の最適流通と流通費用の節減が可能となる(5頁)。また、国際物流の機能は、輸送、荷役、包装、保管および情報の5機能で構成されており、各機能の総合的な物流システムの形成と合理化なくしては、国際物流サービスの最適化を図り得ないことを指摘しているが、この主張は本書が一貫して主張するトーンである。

第2節では、最近のわが国の貿易構造が加工貿易型から製品輸入型および国際分業型に大きく変革されつつあることを指摘して、国際物流のパターンも、典型的な間接貿易型から直接貿易型へ、これをより一層進めて国際分業貿易へと国際物流が急激に変化していく状況を平易に叙述している。

第3節では、輸出入に関する貿易手続きを平易に解説している。

第2章「国際物流の主な形態と業務」においては、第1節「国際海上貨物輸送」、第2節「国際航空貨物輸送」、第3節「輸出入通関」、第4節「輸出包装」、第5節「貨物保険」の5節から構成されている。それぞれの節では、国際物流の主な形態と業務を実務ベースで平易に解説しており、初めて業務にたずさわる人あるいは物流をはじめて学ぶ学生、研究者にも容易に理解できるように意を尽している。

第3章「国際物流の合理化」では、第1節「国際複合一貫輸送」、第2節「国際宅

配便」、第Ⅲ節「物資別専用輸送」、第Ⅳ節「プラント輸送」、第Ⅴ節「企業経営と国際物流」の5節で構成されている。

この章の第Ⅳ節までは、輸送物資別の合理化方策を平易に解説したものである。しかしながら、第Ⅴ節においては、個別企業経営における国際物流管理システムの基本原理をまとめている。既に指摘済であるが、わが国の貿易構造が製品輸入型あるいは国際分業型へと急激に転換してきたために、企業における国際間の商品の流れもわが国からワンウェイ的なものから、日本、アジアN I E S、北米、欧州などのそれぞれを拠点とする多極間を結ぶマルチデレクショナルなものが増加する傾向に変化してきている。こういった傾向の中で企業の取扱う商品は、多品種、少量化してきており、ライフサイクルも著しく短縮化しつつある。このため物流手段も商品の陳腐化の速さをカバーするような迅速処理可能な高質サービスされる傾向が強まっている(176頁)と指摘している。これに対応する物流システムは、物流情報の高度利用による無在庫への接近とジャスト・イン・タイム(JIT)体制の構築、多品種化に対応した混載輸送(consolidation of shipments)などが合理化方策となってきた。こういった動向は、国際物流管理が企業マーケティング戦略の重要な要素となっていることを充分に認識することができるだろう。

続いて、国際物流システムを4基本型に分類し、この4つのシステムをどう組合せるかは、経済的要素、環境的要素、管理的要素によって変動し、企業の期待収入とコストの関係や総体的な経営戦略によって決定されるべきであるとむすんでいる。具体的事例が個別企業にあたって示されているが、前述の基本方向をフォローした型となっている。

第4章「国際物流業の本質と課題」は第Ⅰ節「国際物流とフォワーダー」、第Ⅱ節「総合国際物流業への進展」の2節で構成されている。

第Ⅰ節は、国際物流におけるフォワーダーの活動形態を諸外国の事例と比較しながら検討しており、第Ⅱ節では、国際物流業を営んでいるフォワーダー(Forwarder)やキャリアー(Carrier)が進む方向として総合国際物流業を目指すことが、国際物流の総合的合理化に寄与するとむすんでいる。

3. 本書の特色と意義(むすびにかえて)

本書の出版の目的を国際物流の入門書として位置づけ、著者がこれまでに蓄積してきた国際物流に関する研究を、貿易との関連、物流形態や関連業務および合理化方策について、実務、管理運営、理論という型で平易に解説しようと試みたものである。著者が意図したとおり、本書を第1章から順次読み進めていけば、「国際物流とは何か、当面する課題は何か」が理解できるように構成されている。

しかしながら、国際物流そのものが、国際間の取引あるいは契約を実現するものと

して、国際間の時所的な隔りを克服して経済財の効用を増大させることを内容としているだけに、それについて平易に解説しようと試みたにもかかわらず、テクニカル・タームの難解さに初心者には辟易するのではないだろうか。むしろ一通り国際物流業務を担当し、あるいは初歩的な貿易実務の概論を修得した後で、整理のために目を通すとか、研究のために熟読するといった類のレベルの高い国際物流の研究書である。既に再三指摘したように、第3章第V節、あるいは第4章は、国際物流論における実務を理論化しようと意図した章、節だけに、入門書と銘打った本書を繙く者にとっては難解であろうと想像される。私は、本書は研究書として、一定の高い評価を受けるであろうし、国際物流論が企業経営と結びついて個別企業経営の合理化や国際マーケティング戦略の重要な一翼を担っていく過程を具体的に理論化する一方で、国際物流業者は総合国際物流業を目指すべきであるというむすびにかけての論理展開に興味深く読んだ次第である。このように考えたが故に、一定のレベルにある物流専攻のシニアの学生、学者、研究者、あるいは国際物流専門の実務家、特に管理監督や経営の意志決定の任にある人に本書をおすすめしたい。

(東洋経済新聞社刊、1989年11月、A5判、219頁、定価2800円)